

台湾情報誌

# 交流

2013年10月 *vol.871*

公益財団法人 交流協会  
Interchange Association, Japan

COMPUTEX2013レポート



# 交流

2013年10月  
vol. 871

## 目次

CONTENTS

- 「変化するCOMPUTEX」と「変わらないCOMPUTEX」、  
日本企業にとってのビジネスチャンス  
～COMPUTEX2013レポート～(1) ..... 1  
(吉村章)
- 台北の歴史を歩く その21  
台北市北部・大直と護国神社の歴史 ..... 7  
(片倉佳史)
- 2013年日本青年台湾研修旅行を終えて .....11  
(甲賀晶子、田沼彬文、阿久澤光彦)

編集後記

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

### ● ● 交流協会について ● ●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

# 「変化する COMPUTEX」と「変わらない COMPUTEX」、 日本企業にとってのビジネスチャンス

～COMPUTEX 2013レポート～ (1)

台北市コンピュータ協会駐日代表 吉村 章

## ■ 1 ■ 世界中から 3 万 8,300 人の外国人バイヤーを集めて開催

IT 分野において台湾最大でのイベントである COMPUTEX が去る 6 月 5 日 (火) から 6 月 9 日 (土) まで 5 日間の会期で開催された。会場は台北の世界貿易センター展示場(信義区)と南港ホールの 2 つの地区。信義区では世界貿易センターの Hall 1、Hall 3、国際会議場の 3 か所が会場となった。信義地区から南港までは無料シャトルバスでおよそ 15 分。ここに南港ホールがある。南港ホールまでは MRT (地下鉄) も開通し、会場の地下に MRI (地下鉄) の駅が設けられるなど、両会場を結ぶ交通の便は格段によくなった。

出展企業は ASUS (華碩)、Acer (宏碁)、Gigabyte (技嘉)、MSI (微星) など台湾を代表する国内大手 IT ベンダーをはじめ、中堅中小企業からベンチャー企業までさまざま。主催者の公式発表によると今年の出展規模は 5,042 小間、出展企業数は 1,724 社。海外からのバイヤー登録は 169 の国と地域から 3 万 8,300 人。外国人バイヤーは過去最高の登録者数だった。総来場者は 13 万人と発表されているが、主催者は総来場者数より外国人バイヤーの登録者数を重視する。

また、COMPUTEX2013 を訪れたメディアは登録者ベースでおよそ 1,700 人。国内外の多くのメディアが COMPUTEX2013 の速報を世界中に報道した。また、会期中には 162 本のセミナーやカンファレンスを実施され、多くの参加者を集めた。

3 万 8,300 人という外国人バイヤー登録であるが、恐らく日本国内で開催される展示会では、これほど外国人バイヤーが集まる展示会はないだろう。そもそも COMPUTEX とは純粋な「トレー

ドショウ」であり、ブースでは文字通りバイヤーと出展社との「商談」が繰り広げれる。日本の展示会にありがちな「会場ではとりあえず資料収集・・・」、「トレンドを掴むために出展ブースを見て回る・・・」といった様子は見当たらない。

日本では「収集した資料を会社に持ち帰って、後日改めて連絡・・・」というのが一般的だが、COMPUTEX では会場内のブースで実質的な「商



COMPUTEX2013 は 6 月 5 日 (火) から 5 日間、世界貿易センター展示場及び南港ホールにて開催、合計 5,042 小間に 1,724 社が出展、写真は世界貿易センター展示場/第一ホール



ASUS (華碩)、Acer (宏碁)、Gigabyte (技嘉)、Micro star (微星) など台湾を代表する国内大手 IT ベンダーをはじめ、中堅中小企業からベンチャー企業まで。写真は南港ホールの ASUS (華碩) のブース

談」が行われる。出店側は世界中から集まるバイヤーに台湾製品を買い付けていってもらうための展示会であり、来場者も「買い付け」を目的に集まってくる。ここが日本国内で開催される展示会の大きな違いと言えるのではないだろうか。

つまり、出展する側は「COMPUTEX にブースを確保できるかどうか」（出展できるかどうか）、「COMPUTEX までに展覧製品が間に合うかどうか」（開発が間に合うか、量産にこぎ着けられるか）が企業の存亡を左右するほどの重要な問題なのである。6月のCOMPUTEX に的を絞って製品開発や量産計画のスケジュールが組まれると言っても過言ではない。毎年世界中からバイヤーが集ま



外国人のバイヤー登録数は3万8,300人、国内外のメディア登録者数は1,700人、多くの海外メディアもCOMPUTEXを注目する



ブースでは「商談」が行われる。「収集した資料を会社に持ち帰って、後日改めて連絡」という日本流はCOMPUTEXにはない

るCOMPUTEXに向けて、製品の開発競争が繰り広げられるわけである。

世界中から集まるバイヤーはその年のクリスマス商戦向けの製品を買い付けていく。それがCOMPUTEXが毎年6月に行われる理由のひとつでもある。（詳しくは「変わらないCOMPUTEX」を参照）台湾ベンダーは6月からクリスマス商戦向けの「商談」を進め、夏から秋にかけては製品の「量産体制」に入る。10月から11月に出荷のピークを設定し、「クリスマス商戦」に向けた生産体制に入るのである。

主催者によると、会期中の商談はおよそ250億ドル（米ドル）と発表されている。展示会の会期中に行われた商談としては大きな金額だ。しかし、6月に行われるCOMPUTEXを契機に夏から秋にかけてさらにそれを上回る金額の商談が進んでいく。台湾IT産業の中でCOMPUTEXが果たす役割は大きい。

アメリカ/ラスベガスで開催される世界最大の民生用電子機器見本市International CESがある。（米国家電協会主催/1月）そして、ドイツ/ハノーヴァーで開催される国際情報通信技術見本市がCeBITだ。（Deutsche Messe AG主催/3月）どちらも世界中の業界関係者が注目する見本市である。COMPUTEXはこの2つの国際的なITイベントと肩を並べるほどに注目される展示会となった。業界にもそれなりの大きな影響力を持つ。

さらに最近では、単なるパソコンの展示会に留まらず「デジタル家電」や「通信」の分野へ。そして「クラウド」や「クリーン/グリーン」（環境分野）から「医療エレクトロニクス」、「スマートビークル」の分野へとCOMPUTEXはさまざまな分野への広がりを見せている。





COMPUTEX にブースを確保できるかどうか、出展できるかどうか企業が存亡を左右するほどの重要な問題、出展する側も買い付け側も真剣勝負の商談が行われる



外国人バイヤーはクリスマス商戦に向けた買い付けが目的、COMPUTEX が6月に行われる理由もそこにある



主催者の発表だと会期中に行われる商談はおおよそ250億ドル(米ドル)、引き合いはCOMPUTEXをきっかけにして会期後も継続される

## ■ 2 ■ 「変化する COMPUTEX」と「変わらない COMPUTEX」

COMPUTEX を理解するためには3つのポイントを知っておく必要がある。第一に「製品トレンドを見る COMPUTEX」、第二にトレンドが変わっても定番商品の調達を目的とした毎年「変わらない COMPUTEX」の部分。第三に COMPUTEX の大きな変化を象徴する技術展示を中心とした COMPUTEX。これは「変化する COMPUTEX」であり、ここ数年注目を集めている部分である。以上の3つのポイントであるが、ひとつずつ説明していこう。

まず、「製品トレンドを見る COMPUTEX」とは必ずインテルとマイクロソフトがその年にどんな製品を出展するかが「鍵」となる。COMPUTEX2012 では販売を間近に控えた「Windows 8」が注目製品となった。今年の COMPUTEX では最新型のウルトラブックが世界中のマスコミやバイヤーから注目を集めた。

インテルやマイクロソフトが新しい製品や技術を発表するとき、台湾の OEM/ODM ベンダーが量産パートナーとしてインテル・マイクロソフト陣営の一翼を担う。インテルやマイクロソフトのブースにはパートナーである台湾ベンダー各社の新製品がずらり並ぶ。

つまり、COMPUTEX の注目度合いはインテルやマイクロソフトの動向にかかっていると言っても過言ではない。インテルやマイクロソフトからエポックメイクな製品や新しい技術が発表される年の COMPUTEX は国内外のバイヤーやマスコミから一躍注目を集める。

一方で、インテルやマイクロソフトの動きが静かな年は COMPUTEX のほうも盛り上がり欠ける(?)といった結果になることもある。残念ながら今年の COMPUTEX2013 は昨年の盛り上がりを越えるだけのニュースがなかった。目玉となる製品 (COMPUTEX プレミアム) や技術 (技

術発表)に欠く COMPUTEX だった。

そんな中でも南港ホールにはインテルやマイクロソフトのパビリオンをはじめ ASUS (華碩)、Acer (宏碁) といった台湾大手ベンダーが出展。敢えて言えば今年は Windows 8 と Android 4.2 が切り替え可能なデュアル OS の PC が注目を集めた。キーボードに「Core i 7-4500U」、11.6 インチのフル HD 液晶部に「Atom Z2580」を搭載するデュアルプロセッサ仕様で普段は Windows 8 搭載のノート PC として動作し、液晶部を取り外すと自動的に OS が切り替わり、Android タブレットとして利用できる。

また、Memo Pad 解像度 1280 × 800 ドットの



今年の COMPUTREND には 10 のテーマパビリオンが出展、写真は各パビリオンのロゴ



「製品トレンドを見る COMPUTEX」とはざらにインテルとマイクロソフトの動向に注目

7 インチ IPS 液晶を搭載した低価格タブレットは 16GB モデルを 149 ドル、8 GB モデルを 129 ドルで出荷予定。また、Phone Pad 電話機能をつけたモデルなども注目を集めた製品のひとつだ。

もうひとつの COMPUTEX はインテルやマイクロソフトの動向に左右されない「変わらない COMPUTEX」である。「変わらない」という意味は、ひとことで言うと、「定番商品の買い付け」という意味である。COMPUTEX に出展される製品は決して最新技術の最先端の製品ではないが、むしろ定番製品を買い付けていくことが目的で訪台するというバイヤーも少なくない。

世界中から買い付けに訪れるバイヤーと新製品を出展するベンダーとの間で年に一回定期的に行われる商談が「変わらない COMPUTEX」の部分である。実はここが COMPUTEX が最も COMPUTEX らしい点であるかもしれない。ベンダー側は世界中から集まるバイヤーに自社製品を PR する絶好の機会であり、バイヤー側はクリスマス商戦を睨んだ買い付けを行う絶好の機会となっている。

キーボード、マウス、タッチペンなどの入力デバイスやケース、CPU クーラー、ストレージなどの自作関連製品、USB メモリーやパソコンの周辺機器などが多数出展される。大手企業から中小ベンダーまで顔ぶれは多彩だ。

「変わらない」と言っても製品はもちろん毎年のようにモデルチェンジされる。パソコンケースや CPU クーラーなどは毎年のようにマニア向けに志向を凝らしたデザインが発表され、新しいモデルが続々と登場する。USB メモリーも毎年のように新しいデザインの製品がお披露目になる。繰り返しになるが、定番商品を買付ける COMPUTEX が最も COMPUTEX らしいところでもある。

3 つ目は「変化しつつある COMPUTEX」の部分である。ここ数年、COMPUTEX で技術出展を



インテルやマイクロソフトが新製品や新しいテクノロジーを発表する年にはいつも以上の盛り上がりを見せるのが COMPUTEX

行う企業が増えている。こうした変化を最も象徴しているエリアが「COMPUTREND エリア」である。COMPUTREND とはテーマごとにパビリオンを設け、COMPUTEX の中で注目を集めている製品を集めたエリアである。技術出展、アプリケーションサービス、ソリューションが多い。COMPUTEX2013 の出展規模は 198 小間、10 のテーマパビリオンが設けられた。このテーマは、その年に注目されている技術トレンドにあわせて毎年変化する。

刻々と変化する IT 関連製品のトレンドを占うのが COMPUTREND エリアである。実は、COMPUTEX に出展されるこれらの技術やソリューションは必ずしも革新的な最先端技術というわけではない。最先端技術が結集された製品、高付加価値の製品というよりは、先端技術が応用されたや量産化を待つ製品群である。そういう意味では、「最先端」ではなく「半歩先端」の技術と言ってもよい。単なる技術展示ではなく、実際に技術提携や製品を売り込むことを目的とした製品展示がなされている。

しかし、これらは製品化や量産化を控えた「キーテクノロジー」であり、具体的なビジネスチャンスを生むビジネスの最前線にある技術である。逆

に言うと、寝かせておくとすぐに陳腐化してしまう技術でもある。売り込み競争も熾烈であり、買い付け側の動きも速い。COMPUTEX は製品調達やパートナー探しの商談の場であり、さまざまなビジネスチャンスが交錯するビジネスの最前線といってもいいだろう。10 のテーマパビリオンとは以下の通り。

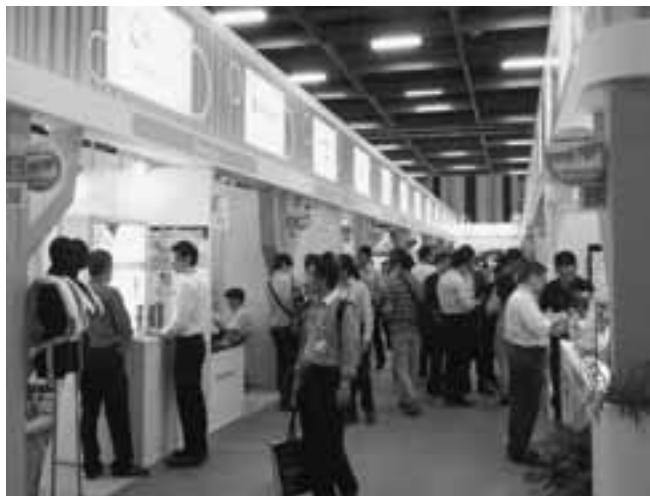
#### ◇ COMPUTREND2013 テーマパビリオン

- ・ Intelligent Vehicle System Pavilion (インテリジェントビークルシステム)
- ・ Android Products Pavilion (アンドロイドプロダクツ)
- ・ e-Store Pavilion (e ストア/デジタルサイネージ・POS 物流システム)
- ・ SmartLife Pavilion (スマートライフ/デジタル家電・周辺機器)
- ・ e-Classroom Pavilion (e クラスルーム・e ラーニング/電子黒板・教育関連ソフト・ソリューション)
- ・ Touch Technology Products (タッチ技術・タッチアプリケーション/タッチパネル・各種入力デバイス)
- ・ Cloud Computing Pavilion (クラウドコンピューティング)



「変わらない COMPUTEX」とは PC 周辺機器、自作パーツ、USB メモリー及び USB 関連製品など定番製品を買い付けていくためのバイヤーとベンダーの「商談の場」とあるという点





COMPUTREND エリアの様子、今年の COMPUTREND は 198 小間と過去最高規模、COMPUTEX の「変化」を象徴するパビリオンが並ぶ

- ・Cloud security Pavilion (クラウドセキュリティ)
- ・3D Imaging Pavilion (3D イメージング)
- ・Robot Pavilion (ロボット)

### ■ 3 ■ COMPUTREND は「COMPUTEX の変化」を象徴する出展エリア

日本から COMPUTEX に出展する企業も年々増えている。「自社の技術を海外で PR したい」、または「海外で提携先を探したい」という企業である。その選択肢のひとつとして「台湾でパートナー企業を探したい」、「台湾企業をパートナーに中国、東南アジアでのビジネス展開を進めたい」という企業がここ数年増えてきた。技術力があり、世界に市場を求めている日本企業にとって、「台湾企業をパートナーにすること」は海外進出の足掛かりとして懸命な選択。「COMPUTEX に出展すること」はパートナー探しの絶好の機会とも言えるだろう。

COMPUTEX2013 に出展した日本企業をヒアリングしてみると、出展目的は大きく3つに分かれる。

第一に、世界中から集まるバイヤー向けに「自社製品の販売」と「販売を目的とした技術力の PR」である。これは、欧米やアジア市場の開拓、

販売パートナーを探すことを目的としている。しかし、実際に出展した企業からは、「欧米だけでなく、東欧や中南米、アフリカ諸国などのバイヤーからの引き合いもあった」とコメントも……。世界中からバイヤーが集まる COMPUTEX ならではのコメントである。

次に、技術アライアンスを視野に入れた台湾ベンダーに対する PR である。ターゲットを台湾ベンダーに絞って COMPUTEX に出展する企業も少なくない。「台湾企業に対する自社技術の売込み」、「生産委託先探し」というのが目的。この場合、来場者だけではなく、COMPUTEX に出展している企業もターゲットとなる。自社ブースで来場者に対応するだけでなく、会場を回って他の出展企業にアプローチして積極的にパートナー探しに取りんでいる企業もあった。徹底的に展示会を有効活用しようとする姿勢に担当者の「ホンキ度」の高さを感じる。

3つ目の目的は、台湾企業が持つ「ネットワーク力」に注目している企業である。台湾企業と提携して、その人材をうまく活用し、中国やアセアン市場の足掛かりにしたいという目的だ。「アジア圏での販売パートナー探し」、また単に代理店探しではなく台湾企業のネットワークを活用して「アジア圏での共同マーケティングへの取り組み」といった目的である。「台湾人材を活用して華人圏での現地法人のオペレーションを任せる」といった踏み込んだ提携関係を模索している企業もある。

以上のように企業によって取り組みはまちまちだが、目的はどれかひとつではなく、さまざまな可能性を模索しながらパートナー探しに取り組んでいる。COMPUTEX に出展する企業は「元気のいい企業」の象徴であるとも言える。どの企業も積極的な姿勢が目立つ。

(次号に続く)



## 台北市北部・大直と護国神社の歴史

片倉 佳史

台北の歴史を誌上でたどってみよう。今や人口260万を数える大都市に発展しているこの町だが、その基礎は日本統治時代の半世紀の間に築かれている。今回は台北市北部の内湖と東部の松山の両地区の歩みを紹介してみたい。

### 「大直」の地名に刻まれた歴史

台北市の北部に位置する内湖区は近代的な高層ビルが林立する新興開発エリアである。MRT(都市交通システム)木柵線の順延開業によって居住環境は向上し、今や、信義区と並んで、台北で最も人気の高い住宅エリアとなっている。地価の上昇率などの統計でも毎年必ず上位に名を連ねる地域である。

地図を開いてみると、台北盆地の北側には基隆河が流れている。内湖地区はその北岸に位置しており、背後には深い緑に覆われた山並みが迫っている。ここに「大直」という地名が確認できる。まずはこの地名に隠された秘話から紹介してみたい。

ここは広い河岸が緑地として整備されており、市民の憩いの場となっている。サイクリングロードも整備され、早朝や夕方などは身体を動かしてやってくる人々でちょっとした賑わいを見せる。さらに、毎年、端午節に行なわれるドラゴンボートレースの会場になっていることもあり、「大直」という地名はそれなりの知名度を得ている。

この土地は、古くはケタガラン族の人々が暮らしていた。その後、16世紀頃から台湾南部に漢人系住民の移入が始まり、平地原住民との混血が進

んだ。オランダ統治時代、そして、鄭氏政権時代を経て、清国統治時代には出身地を異とする集団による勢力争いが頻発するようになる。これは「分類械闘」と呼ばれ、族群(エスニック・グループ)による衝突と戦乱が繰り返された。ケタガラン族の人々はこの時期に同化が進み、アイデンティティを失ったとされている。

「大直」という地名をさかのぼってみると、これは地形に由来していることがわかる。1684年に編纂された「清康熙台湾全島預覽図」の中にはすでに大直の名が記されている。基隆河は常に曲がりくねった状態で流れているが、この辺りを流れる時だけは一直線となって、河幅が広がる。これが「大直」の由来である。つまり、「まっすぐに、かつ太い」という河流の状態から大直の地名は生



基隆河の河畔はちょっとした公園のようになっている。毎年端午節にはドラゴンボートレースが開催され、多くの人々にぎわう。



ドラゴンボートレースの練習風景。今や外国人チームも参加する大きなイベントとなっている。5月・6月の風物詩である。

まれたのである。日本統治時代には「だいちよく」と呼ばれていた。

なお、本連載でも述べてきたように、日本統治時代、台北市北部には複数の神社が設けられていた。剣潭山の山麓、現在は圓山大飯店が建っている場所には台湾神社が鎮座しており、その東の脇には台湾神宮が鎮座式を待っていた（挙行前に焼失）。そして、後述するが、現在、観光客が多く訪れている忠烈祠は護国神社があった場所である。つまり、大直地区には三社の神社が基隆河を挟んで市街地に対峙していたのである。

## 台湾にもあった護国神社

日本統治下の台湾には数多くの神社が存在したが、その中で、護国神社は台北だけに一社が設けられていた。護国神社は戦中期に誕生したもので、1939（昭和14）年にその制度が定められている。各地に点在していた招魂社をまとめ、一本化することを目的としていた。言うまでもなく、これは戦時体制下、国威発揚を目的としており、国情に合わせて誕生した新しいタイプの神社だった。

台湾の護国神社は昭和15年7月18日に出された台湾総督府告示第284号で創建が決まり、関連施設が起工された。敷地は先述した台北市大直が選ばれた。これは台湾神社の東隣りに位置し、「昭和の大造営」と呼ばれた計画の一環だった。

この神社の神苑のモデルとなったのは明治神宮と樞原神宮だったという。本殿は流造りとされた。祭神となったのは靖国神社の祭神で、これに加え、「台湾にゆかりのある殉国者」が合祀されていた。その数は9226柱にもものぼっていた。

1941（昭和16）年1月15日には地鎮祭が挙行されている。そして、翌年5月23日に鎮座式が盛大に行なわれている。この5月23日は終戦まで、毎年の例祭日とされていた。

護国神社の特色として挙げられるのは、例祭のみならず、定期的に祭神を追加登録していく「合祀祭」が実施されていたことであろう。これはほかの神社では見られないもので、規模も大きかったという。

護国神社の創建により、各地に設けられていた招魂碑や招魂社は靖国神社の下、護国神社の名称



忠烈祠は中華民国のために命を投げ出した英霊を祀る空間である。また、鄭成功が祀られているほか、霧社事件の犠牲者となったモーナ・ルダオ、花岡一郎、花岡次郎、西来庵事件の首謀者・余清芳など、抗日義士たちも祭神とされている。



護国神社は台湾では一社のみが設けられていた。しかし、神社としての運命は短かく、記録はもちろんのこと、古写真を探すことも難しい（高橋正己氏収蔵）。



日本統治時代に発行された絵葉書の様子（高橋正己氏収蔵）。

で収められることとなった。このほか、慰霊祭、戦勝祈願式、そして、各種報告会なども護国神社を会場に行なわれることが多かった。そういった意味では、神社ではありながらも、催し物やイベントが数多く開かれた異色の空間といえる存在だった。

台湾護国神社は正面に拝殿、祝詞殿、本殿があった。これに加え、両側に参列舎（翼舎）が設けられていた。これは全国の護国神社に関していえば、ほぼ共通して見られるものである。しかし、従来の神社には見られないもので、護国神社特有のものであった。

また、広場そのものが際立って大きかったことも特筆されよう。これは祭典や式典時の参列者が

非常に多かったため、軍・官の要人や遺族の代表者は左右翼部に設けられた参列席に着席し、順に拝殿へと向かった。遺族や兵士たちは広場でこれを見守った。現在の忠烈祠を訪れると、社殿の前に広大な前庭があるが、これは神社時代の広場が受け継がれたものである。

## 護国神社の跡地を訪ねる

台湾護国神社は鎮座からわずか3年あまりで終戦を迎え、廃せられている。日本は台湾の領有権を放棄し、その後、中華民国国民党政府が進駐を果たす。日本人は本人の意思にかかわらず、引き揚げを強要され、神社施設の管理も行なわれなくなった。遺棄される形となった各地の神社は国民党政府の排日政策もあって破壊、撤去の憂き目に遭い、痛々しい姿を晒すことになった。

台湾の統治者として君臨した国民党政府は日本が残していったものを敵性遺産として接收していったが、護国神社もその例に漏れなかった。そして、当時、中華民国行政院長の地位にあった蔣経国が中華民国軍人の英霊を祀る忠烈祠をこの地に設けるよう、指示を下す。完成は1969年3月25日であった。

敷地には北京の紫禁城内の大和殿を模した建物が社殿として造営された。蒋介石はここに「国民革命忠烈祠」と揮毫した。そのため、当時の名称はこれに合わせられたが、通称としては圓山忠烈祠、もしくは大直忠烈祠、台北忠烈祠と呼ばれていた。祀られているのは主に抗日戦争や国共内戦、金門・馬祖の戦役などで戦死した三十数万人であり、3月29日と9月3日には盛大な祭典が執り行なわれている。



現在は関連施設のすべてが建て替えられている。当然、日本統治時代の面影のようなものではなく、戦後の言論統制の時代、護国神社の存在は意図的に隠されてきた部分もあったため、遺構というべきものはないと思われてきた。しかし、敷地のはずれには、神社の石灯籠が忘れられたように残っている。

石灯籠は分解された形になっており、完全な状態ではない。しかし、胴部には「奉獻」の文字と「帝国在郷軍人会」の文字がはっきりと読み取れる。通常のものよりも大きなもので、堅固な印象の石塊が使用されている。

この石灯籠は正確には忠烈祠の敷地外にあり、通常、拝観客が目にはできる場所にはない。管理人などに尋ねてみても、ここに石灯籠が残っていることを教えられることはない。しかし、石灯籠は確かに残っている。筆者もここに石灯籠が残っているとは思わず、まさに偶然というべき出会いだ。人目につかない場所であり、この場所に足を向けたことが自分でも不思議なくらいである。打ち捨てられた遺構が筆者を引きつけたのかもしれないとまで思ってしまう状況だった。

なお、台湾護国神社に奉納されていた神馬も現存している。これは連載第二回目でも記しているが、台北市二二八和平紀念公園の敷地内にある。説明書きや案内板などはないが、この神馬像の腹には護国神社の神紋が確認できる。さらに下腹には製作者の刻印も見える。そこには「祥雲作」という文字が残っている。これはコンクリート像作家として知られる浅野祥雲と思われるが、これは



今も残っている護国神社の石燈籠。完全な形ではないが、護国神社の遺構が残っているのは奇跡に近い。



台北 228 和平紀念公園内に移設されている護国神社の神馬像。ここにおかれるようになった経緯など、詳細は不明である。

推測の域を出ない。浅野が手がけた作品の数は多く、1000 を超えると言われるが、確かにその中に神馬も含まれている。しかし、そうだとしたら、どのような経緯で台湾との関わりが生まれたのか、それが謎である。今後の調査が待たれる。

(次号に続く)

## 2013年日本青年台湾研修旅行を終えて

(公財)交流協会では、日台友好交流促進を目的として、6月17日～21日の日程で若手の地方公務員、学生を対象に台湾研修旅行を実施しました。今回参加者に研修の感想をいただきましたのでご紹介します。

### 良好な日台関係を知る旅

甲賀晶子(奈良県:政策研究大学院大学修士課程)

平成25年6月17日(月)～21日(金)の日程で2013年日本青年台湾研修に、政策研究大学院大学から計4名参加させていただきました。

羽田空港から約3時間で、台北松山空港に到着。週末、東京と奈良を片道4時間かけて移動している私にとっては、とても近く感じました。場所によっては国内旅行より台湾旅行の方が気軽な旅行なのかもしれません。

まず、初日は台湾の外務省にあたる外交部を訪問しました。そして、夜は、外交部の主催による歓迎会を催していただきました。歓迎会では台湾の民族舞踏を小学生の皆さんが披露してくださり、とても和やかな雰囲気の中に歓迎会は終始しました。また、歓迎会を催していただいた会場が、日本統治時代に建立されていた台湾神宮の跡地を利用し建設された「円山大飯店」で、その素晴らしい建物にもまた一同感激いたしました。

研修2日目は公益財団法人交流協会台北事務所を表敬し、台湾と日本の歴史的な繋がりや現在の両国の情勢、また現政権の政情などについてご説明いただきました。2日目に日台関係についてのレクチャーをいただけたことにより、この後の研修が大変有意義になり、実り多いものとなりました。

今回の研修では、観光部局担当者が多いという

こともあり、台北市観光旅行局をはじめ、台北市の主要観光地である、台北101や猫空ロープウェイ、士林夜市などにも積極的に連れて行っていただき、台湾の魅力を思う存分、味わうことが出来ました。

研修3日目は、台湾新幹線で台南へ移動しました。台南市政府を表敬し、その後、烏山頭(うさんとう)ダムの視察をさせていただきました。

台南市は今でこそ農業が盛んですが、大正9年に着工され4年後に完成した烏山頭ダムが無い時代は、雨による洪水と干ばつの繰り返しで、安定した農業が出来なかったとのことでした。

現在に至るまで日本にシンパシーを送ってくださっている台湾は、実はこのダム建設や灌漑設備を手掛けた八田興一氏(はった・よいち)への畏敬の念や、このような台湾の社会資本の整備にかけた日本の度量の大きさ、真剣さや技術の高さに



烏山頭ダムの畔にある八田興一氏の銅像

対する感謝の念を、台湾社会は今でも大事にしているからだとの説明を受け、そのことに大変感動いたしました。

昭和17年にフィリピンに向けた大洋丸に乗っていた八田氏は57歳の時、アメリカの潜水艦に撃沈され亡くなりました。漁船に引き上げられ、故郷の石川県で荼毘に付された後、遺骨が烏山頭に戻され、この地に墓が建立されました。

烏山頭ダムにより満々と湛えられた湖の前に、八田氏の銅像があり、お花が置かれていました。現在烏山頭ダムにある八田氏の銅像はダムの完成後の昭和6年に作られたもののだそうですが、その後国家総動員法に基づく金属類回収令の施行時や、中華民国による日本の建築物や顕彰碑の破壊がなされた際も、地元の有志によって守り隠され続け、昭和56年に再びダムを見下ろす元の場所に設置されたそうです。まるで、八田氏がまだ見ぬダムの完成の姿を思い描いているようでした。

日本人にはほとんど知られていない八田氏ですが、台湾ではアニメにもなっていました。台湾の人たちにとって大変身近な存在だと言えます。八田氏は、土木作業員の労働環境を適切なものにするため尽力したこと、危険な現場にも進んで足を踏み入れたこと、事故の慰霊事業では日本人も台湾人も分け隔てなく行ったことなど、彼の人柄による功績は非常に大きいと感じました。

現在の日台関係があるのは八田氏のおかげであると言っても過言でないほど、八田氏の功績は素晴らしいものだと思います。そして、この八田氏の功績を、日本人はもっと知るべきであると感じました。今回の研修で、台南を訪問させていただけたことは、日台関係を理解させていただく上で非常に貴重な経験となりました。

4日目は、地元台湾の大学生と一緒に、グループに分かれて、台北市にある指定の史跡等へ行ったり、指定のお店で台湾料理を食べたりするオリエンテーリングを実施しましたが、私は体調を崩



政策研究大学院大学から参加した4人と全行程を共にしてくれた台湾の学生さん達

してしまい、悔しい思いをいたしました。ですので、再度、台湾を訪れたいと思っています。

また、最終日の夕食は救国団が主催で晚餐会を開催してくださり、大いに盛り上がり、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。お土産にいただいた、研修中の写真が収まったCDデータは、今でも大切にしています。

今回の研修に際し、公益財団法人交流協会様、台北駐日経済文化代表処様、亜東太平洋司様、台北市政府観光伝播局様、救国団様、台南市政府観光旅遊局様には大変お世話になりました。ここに感謝いたします。

また、全行程を同行してくれた台湾の学生の皆様には、通訳、現地の案内など多大な活躍をいただきました。彼・彼女らと共に行動できたことは、思い出深い、楽しい研修となりました。あわせて、ここに感謝いたします。

最後に、今回の研修を通して出会った方々に感謝申し上げるとともに、この出会いが今後の日台関係のますますの発展につながりますようお願いいたします。



## 祈りの姿

田沼彬文（東京大学大学院修士課程）

今回の研修旅行では各所で非常に歓迎していただいた。まずこのことで重東関係協会を初め、台湾の政府関係者の方々、現地で研修をサポートして下さった方々（とりわけ救国団の方々）、研修の手配をしていただいた交流協会の皆様には、いくら感謝をしてもしきれない。一大学院生の私にとっては過分なご歓待をいただき、ただただ恐縮するほかない。初めて訪れた台湾で、さまざまな施設や観光名所を見学させていただきだけでなく、現地の大学生と交流する機会もあるなど、得たものは大きかった。

だが読者には、おそらくすでに日台間の実務に携わっておられるか、日台関係について平均的な日本人よりも強い関心をお持ちの方々が多いのではないだろうか。そうした方々に対してあえて文章にしてご紹介するとすれば、私は台北市の台湾省城隍廟で受けた印象を取り上げたいと思う。

研修4日目は団全体が少人数のグループに分かれて台北市内の散策を行ったが、筆者は4名のメンバーと共に、台湾の大学生2名の案内で、かつての城中区のあたりを回るようになった。ちょうど昼頃で、飲食店などが所狭しと並ぶ市場は人があふれ、活気に満ちていた。その市場のすぐ近く、何台ものバイクが並ぶ通りに面した一角に、鮮やかな赤や黄色で彩られた城隍廟はあった。城隍とは街の守り神のことである。市場の中ほど人は多くないものの、少なからぬ人が、都会の喧騒に妨げられることもなく、中で熱心に祈りを捧げていた。おそらく観光客ではなく、現地の人々であろう。その姿は、レセプションで我々を歓迎してくれたのとも、研修の最中我々を案内してくれたのとも、商店などで短いやり取りをしたのとも違う、台湾の人々の姿であった。我々も案内に従ってお

線香をあげ、それぞれに願い事をして、その場を後にした。

無論、城隍廟で目にした現地の人々が一体何を祈っていたのかは知る由もない。別に日台の友好関係の発展を祈っていたわけでもないだろう。しかしながら、日本人の見ていないところで、日台の友好を願い、またそのために行動している台湾人がいなければ、今日の関係はありえないということにも同時に気付かされたのである。一般論として、経済的な結び付きが深まることや、地理的・歴史的・文化的な近接性は、それ自体で友好的で平和的な関係性の保証となるものではない。お互いのことを知れば知るほど好きになる、ということが常に成り立つわけではないのである。何の摩擦も困難もない関係など、そもそも存在しないのだ。ましてや日台間のように、経済関係などの物質的な面がいかに充実しようとして、すでに外交関係がない状態で安定的な関係を維持することは、本来必ずしも容易ではないのだろうと想像する。今日の関係は、実務に携わっておられる方々の奮闘の賜物なのだろう。

このように考えると、国境を越えて友好的な関係を築くために不可欠なのは、平たく言えば「どうしてもこの人々と仲良くしたい」という願いであり、またそうしないわけにはいかないという現



元々本誌への掲載を意図して撮られた写真ではないが、城中市場の内部の様子が辛うじて窺えると思う。



台湾省城隍廟の内部に安置されていた像（どのように呼称するのが正確なのかは分からない）。城隍廟の全体を写したような写真は取り損ねていた。この像は城隍廟の奥深くではなく、内部に入っ  
てすぐ右手に安置されていた。

状認識に根差した行動の積み重ねなのではないだろうか。この点で、日台関係は単に良好であるというだけでなく、我々に勇気や希望を与えてくれるものでもあるだろう。筆者にとってこの研修は、日台関係のさらなる進展のための決意を新たにさせてくれるだけでなく、台湾以外の国や地域と日本とのつながりについても教訓を与えてくれるものとなった。

とはいえ、個人の立場で実際にできることというのはなかなかないかもしれない。せめて、さまざまな喧噪の中にあってもそれに惑わされることなく、まずは真摯に友好関係を祈るところから始めてみたい。

## 2013 年日本青年台湾研修旅行レポート

阿久澤 光彦（前橋市）

この度の台湾招聘事業について、交流協会から突然メールが届き驚きました。

また、交流協会の方とは、昨年東京銀座にある群馬県のアンテナショップ（ぐんまちゃん家）で開催されたサロンD G（情報交換会）において名

刺交換をしたことがきっかけでした。

前橋市はインバウンドについてはほとんど手掛けていない状態で、更には自分が外国に1回しか行ったことがなく、参加について非常に悩みました。

しかしながら、交流協会の方は、「外国に行き慣れていない、公務員の方の参加を歓迎！」とのことでした。

このメールの件を、家族にも相談しましたが、理解、家族決裁を受けることが一番の難関でした。

しかしながら、周りからの意見で台湾の治安や言葉の心配がないことを聞き、家族に伝え理解を得ることができ、周囲からも後押しされ決心しましたが、県内から1人の参加と言う事に抵抗はありました。

また、今回の台湾招聘事業は、全額台湾政府が負担していただだけ、行政からの負担も一切なく、業務として出張ができるということで職場からの了承を得ることができました。

### 「台湾情勢について」

台湾とは時差が日本より1時間遅く、ほとんど日本と変わらない状況であります。また、羽田空港から台湾の松山空港へは3時間と、近い国です。

台湾の気候は日本と似ていて、6月は梅雨で今回の研修中は、毎日35℃近くあり湿度が高くとても暑い日ばかりで、毎日天候に恵まれました。お陰様で、毎日台湾ビールを美味しくいただくことができました。

台湾の交通機関としては、スクーターバイクが主でかなりの数に驚かされる状況でした。そのバイクは2人乗りまではOKとなっております。「スクーター大国の台湾！」とも言われ、1.8人に1人はバイクを保有しているようです。

そこで、感心したこととして走るマナーや停めるマナーが良いことです。

駐車場もあまり見当たらず、歩道や車道の白線内に、整列してバイクや自動車が停められてい

る状況です。

また、信号機を見て驚かされたのが、電光カウントダウン方式です。これは日本にも是非取り入れて欲しいと思いました。

研修の中で、台北から台南（最南端は高雄まで全長 345km）までの移動手段で、台湾高速鉄道（日本の新幹線技術）を利用しました。ほとんど日本の新幹線とは変わりがなく、快適な感じを受けました。

台北では、台北捷運（MRT）の地下鉄も利用しました。こちらのチケットは、プラスチック製のコインチップで、持ち帰ることはできません。

また、この取り組みは「ごみの減量化」にもつながっているようです。



台北城市グループ探索にて①



台北城市グループ探索にて②

移動手段として、タクシーも利用し、初乗りは 70 元（日本円で約 210 円）で、ドアは手動、行き先の指示は住所を書いた紙や地図などで位置を示せば、目的地まで送っていただき心配がいらぬです。

車の運転では国際免許は通用しないようですが、日本の運転免許証を中国語に翻訳したものが必要となり、日本自動車連盟（JAF）、ならびに交流協会が発行できるようです。

台湾から日本へ訪れる観光客の数は、世界の中でも 3 位と多く、近いうちに、更に順位が上がりそうです。

また、近いうちに学校の教科書にも日台会話のやり取りが取り上げられるようです。

台湾人は、大河ドラマが好きで、日本の雪・温泉・海山物料理を好み、歴史にも興味があり、日本の小説を読む人が多いようです。

更には、産業などが遅れていた台湾に、病院や鉄道などの建設に日本人が貢献し、歴史を変えて行き、今でも台湾の人々は日本人を尊敬しているようです。

### 「台湾研修の中で」

台湾政府の表敬訪問のあいさつの中で、「日本の若者が台湾に来ていない！」

そのため、今回の研修を通じて台湾の国のイメージを「日本に持って帰って欲しい！」と台湾政府に告げられました。

日本側からは長谷川団長のあいさつで、「台湾招聘事業は今年で 4 年目を迎え、年齢制限をしたのは今回初めてで、参加者も一番若い年齢層であると説明され、また、2 年前、東日本大震災では、多大の支援をいただき日本人は皆感謝の気持ちでいっぱいです！」とお礼を述べられました。

台南市局長のあいさつの中で、今後より多くの日本各都市と友好都市を結んで行きたい！日本人の八田與一氏により、台南市にダムや水路を作り、農業振興に大きく貢献し、記念館により功績が紹介され、現地も視察させていただきました。



台南市には、毎年5,000人の日本人が訪れているとのことでした。

また、台南市は群馬県前橋市とは深い縁があります。

その理由として、日本人最後の台南市長として、前橋市（富士見町）出身の「羽鳥又男氏」がいたことです。今では、出身地である前橋市（富士見町）のお寺に銅像として、台湾大富豪者より寄贈され祀られております。

台湾にダムを造ったことで知られている、八田與一氏は石川県金沢市生まれの技師で、郷里の金沢市には資料館もあり、台湾から訪れる人も沢山いて、加賀屋という有名な旅館には、年間1万人以上の台湾人が宿泊されるそうです。

是非この様に、前橋市にも何れ仕掛けられたら良いと思いました。

今回、貴重な台湾研修でもあったので、群馬県前橋市を全国から海外へ向けPRしようと思いました。

そこで、前橋市は豚肉の産出額が全国でもトップクラスであり、マスコットキャラクターとして「TONTONのまち前橋の“ころとん”」が活躍しております。

研修中では、ストラップや缶バッジを日本青年団員と台湾政府関係者や台湾の大学生などに配

り、群馬県前橋市をPRしました。特に女性からは「可愛い！」と好評でした。

今回の研修を通じて、参加者のほとんどが観光分野の所属だったため、今後の業務や情報の収集に活かして行けたら良いと思いました。

また、研修中に他県の方が、インバウンドでやり取りしている台湾の旅行会社の方と現地で交流を図り、そこに同席させていただき、情報交換ができ参加させていただき良かったです。

今回の招聘事業の目的は、「台湾をよりよく理解するため」、台湾現地機関などを表敬訪問し、座談会と研修を通じ、日台間の友情と相互理解を深めることとしており、参加した日本青年団員の方は、それぞれに好印象を持たれ交流が図れたことと思います。

研修では前泊し交流会が設営され、自己紹介及び名刺交換をしたことにより、お互いを知り、台湾の研修に望むことができ、不安であった台湾研修も、日本青年団員と台湾政府関係者や台湾の大学生とで交流が図れたことにより、日台がより近くなったような気がしました。

今回の研修で、同行された日本青年団の皆様ならびに台湾関係者の方々、また事務局でご苦労いただいた交流協会の方々には、大変お世話になりました。



前橋市からのお土産を渡す



故宮博物院前に前橋市“ころとん”参上

## 編集後記

最近、日本全国20県の地方公務員及び大学生の皆様30名と一緒に台北・台南を訪問し、日本の地方の魅力を台湾の中央政府や地方政府の皆様にご宣伝すると同時に交流を深めるという事業に参加させていただきました。以前にも何回か台湾に出張していますが、今回初めて2011年3月から運航している台湾の航空会社のキティちゃんジェットに搭乗することができ大変感激しました。数時間乗っているだけの交通手段にも関わらず、チェックインカウンターのモニター、バゲージタグ、スーツケースステッカー、搭乗券、リネン、クッション、機内安全マニュアル、エチケット袋、機内ショッピングカタログ、イヤホン袋、ハンドソープ、化粧水、乳液、紙コップ、トイレトーパー、客室乗務員のエプロンやネームバッジ、機内食や食器、全てにキティちゃんがあしらわれていました。日本人顔負けの徹底ぶりにさすががしさまで感じてしまう3時間でした。皆様も今後もし機会があればお試してください。

(A.H.)

## 交流 2013年10月 vol.871

平成25年10月25日 発行

編集・発行人 井上 孝

発行所 郵便番号 106-0032

東京都港区六本木3丁目16番33号

青葉六本木ビル7階

公益財団法人 交流協会 総務部

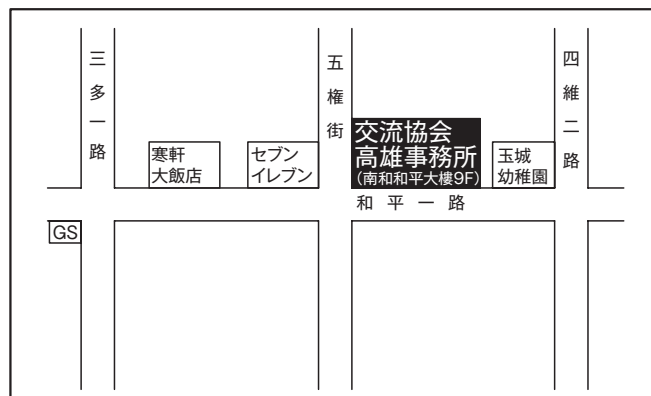
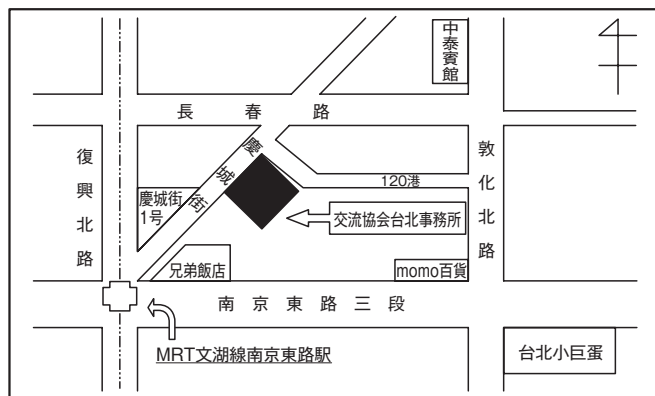
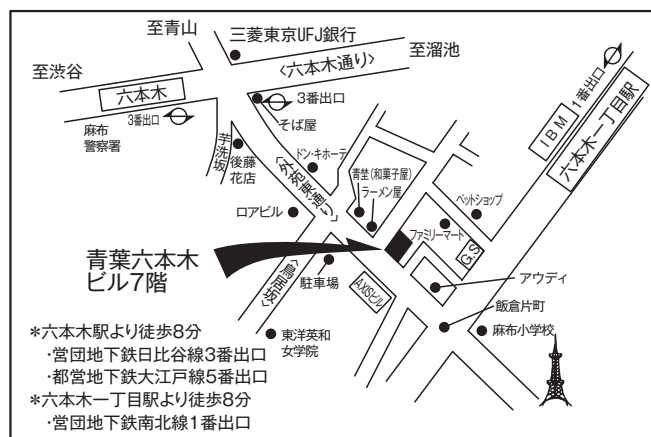
電話 (03) 5573-2600

FAX (03) 5573-2601

URL <http://www.koryu.or.jp>

表紙デザイン：株式会社 丸井工文社

印刷所：株式会社 丸井工文社



台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓

Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei

電話 (886) 2-2713-8000

FAX (886) 2-2713-8787

URL [http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top)

高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87号

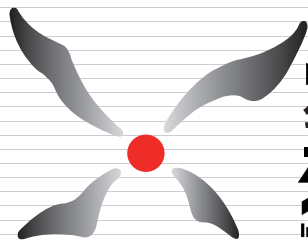
南和和平大樓9F

9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan

電話 (886) 7-771-4008 (代)

FAX (886) 2-771-2734

URL [http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top)



日本と台湾との架け橋

公益財団法人

**交流協会**

Interchange Association, Japan (IAJ)

